

医師のメール（窓・論説委員室から）

1999年7月13日 夕刊

患者思いの診療所のお医者さんから、「私はいま、落ち込んでいます」というメールが届いた。事情はこうだという。

「脳腫瘍で痴呆症の患者でした。点滴すると元気になり、大声を出して動き回る、栄養の管を抜いてしまう。老いた妻は涙を流しながら手足を縛り、身も心も疲れ果て、見かねた私は老人病院に連絡しました。病院は縛ることを条件に引き受けたのです」

このメールを仙台市いずみの杜診療所の山崎英樹さんに転送した。国立療養所の痴呆病棟勤務医時代に、縛るヒモを一切追放し、理想の在宅医療を求めてまちに出た人だ。山崎さんからメールが返ってきた。

「きつい言い方ですが、『脳腫瘍で痴呆症の』という書き出しがすでに縛る行為の正当性を主張しています。弱ったら『縛らない医療』、元気になったら『縛らない介護』を根気よく繰り返すしかありません」

この助言を、冒頭のお医者さんに送った。三カ月後、「自慢していいですか？」というメールが飛び込んできた。

「こんな報告ができるようになりました。口からはまったく食べられず、痴呆もかなり進んでいる方です。心不全で呼吸困難。元気をとり戻すと栄養の管を抜いてしまいます」

それを、管を抜いたら、「抜くだけの体力が戻った」と家族ともども喜びことにした。「食べさせるのではなく、食べていただく」とジャムをなめてもらうことから始めた。

「驚いたことに『おいしい』と言うではありませんか。ずっと言葉がなかった方がです」

後はとんとん拍子。普通食が食べられるようになった。

「私はいま、あの言葉をかみしめています。『元気になったら縛らない介護、弱ったら縛らない医療を根気よく』。また悩むことがあったらメールしていいですか？」〈雪〉